

産業循環と「生産＝消費」(1)

梅 垣 邦 胤

はじめに

資本主義社会において、好景気の時代があり不景気の時代があること、好況、活況の時と、不況、恐慌の時があること、それはよく知られた事実である。¹⁾

その循環の一局面である、恐慌について語る際に、時折紹介される印象的なエピソードがある。それはある炭坑労働者の家庭の会話である。季節は冬。

子供「お母さん、寒いよ。石炭を焚こうよ。」

母「うちにはもう石炭は無いんだよ。お父さんが失業したから石炭を買えないんだよ。」

子供「お父さんはなぜ失業したの。」

母「それはね、お父さんの会社は石炭をたくさん掘って、売れなくなったからだよ。」

子供「……」²⁾

これは奇妙な内容を暗示する会話である。炭坑労働者一家が暮らしているその国（アメリカ）には、膨大な石炭が堆積している。それは現在の消費能力を超えた豊かな生産物をその国が獲得し得たこと、豊かな生産物を獲得しうる生産力の高い水準にその国はすでに到達していることを明瞭に

示している。直接的生産者の必要量、この場合であれば炭坑労働者一家が必要とする石炭をすでにはるかに凌駕する量の石炭をこの一家の主人は採掘しているのである。しかし、ほとんど考えられないことだがこの一家の家庭には、そしてこの一家に代表される、「失業した炭坑労働者達」のどの家庭にも一粒の石炭もなく、そしてそのような状態は「自然な現象」として、彼らにのみたまたま訪れた不幸として忘れられ、放置されたまま時は過ぎてゆくのである。

このような事態を回避しうるのは、多分、ただ事前にこの大量の石炭が、それを採掘した労働者達「以外」の人たちによって「購買」され、「需要」されるときのみであろう。彼らを雇用している企業が潤沢な貨幣を取得しうるときであろう。そのときには、むしろより多くの労働者を雇用することが必要となり、「労働者不足」となり件の会話を交わした母と子の一家の暖炉には石炭が燃えさかり、子供の頬は暖かく、柔らかく、そして笑顔であったであろう。

しかし、産業循環の軌跡の中を歩む資本主義の下においては、恐慌と不況がその不可欠の一局面として組み込まれ、周期的に現れてくる。恐慌と不況の局面において、膨大な需要を予想することは、形式的なレベルだけでも恐慌と不況とした前提を否定するものであり、あり得ないことであった。『資本論』ではこの点について、上では「石炭」つまり「生産物＝消費対象」としていたものを「商品」と言い、「人民大衆にとって不足しているその同じ商品にたいする需要がないというようなことは、いったいどうしてありうるのだろうか」³⁾ という疑問をなげかけている。生産されたものに需要があれば、その生産者は生活に必要なものを「需要」出来る。しかし、生産されたものは販売しうるだろうか、はたして需要はあるのだろうか。これは、この資本主義のもとで全ての人たちに突きつけられ、回答を求められている「問いかけ」である。これはひとり企業家のみが直面している課題ではない。労働者は、「自らが陶冶してきたこの自分、自分自身の人柄、才能、技能、インテリジェンス、等々」ははたして「需要」

されるだろうか、「販売」されるだろうか。このような問いかけは労働者にとっては無縁のものだろうか、自らに問いかけないだろうか。好むと好まざるとは無関係に、つまり個々人が選択しうる領域ではない問題として、しかし、個々人にとって切実な問題として、その意味で否応なく直面させられ、解決を迫られている課題ではないだろうか。(少し、横道に逸れるが、個々人が思考を放棄したり取り上げたりという選択は不可能であり、個人の意思を超えて且つその当の個人に解決を迫ってくる領域、それが「社会科学における法則」の問題、つまり経済社会において「客観的に」作用しているものは何なのかを発見するという課題につながる領域である。)

では、この問題に取り組んだ人々は事前に生産物、あるいは「自ら」が「販売」され、「需要」されると確言出来るであろうか。分からないけれどそれを目標とし進むことが、実践が唯一の回答ではないだろうか。とすれば、やはり販売されるか、需要されるかは分からないのである。販売に成功するかも知れない、しないかも知れない。需要もまた同様である。つまり、人民大衆に不足している「商品」がなぜ販売されないのかという疑問には今までの所、回答は与えられていないのである。

この様な事態には、ここではまだ漠然としたレベルでしか語ることが出来ないが、特有の形態における膨大な生産力、「過剰生産」の問題をすでに暗示している。『哲学の貧困』では、機械制大工業段階においては、消費水準に生産力水準は達せず、消費内容は貧しいレベルに押さえられている時代はすぎ、機械体系という装置は、継続的かつ大量の生産が前提され、需要とは一見無関係に生産されるとしている。「生産は消費のあとを一步一步ついていったのである。ところが大工業は、自分の手中にある諸手段そのものに強制されて、つねに規模を拡大して生産しなければならないので、もはや需要をまっていられないのである。生産は消費に先行し、供給が需要を強制する。」⁶⁾

「商品経済社会」「資本主義」から今しばらく対象をずらし、非資本主

義的世界を眼前におき、その上で、改めて両者を比較して見れば、ここで問題にされていた同じ対象がもっている他の断面が姿を表し、同じ問題が異なる角度から検討出来る。そのために、ここではアメリカではなく日本の素材を、炭坑労働者の家庭ではなく、「村と都」の話、木下順二『夕鶴』をとりあげよう。⁴⁾「一面の雪の中に、ぼつんと一軒、小さなあばらや、家のうしろには、赤い赤い夕焼け空が一ぱいに—遠くからわらべ唄—」これが、物語の主人公達、つうと与ひょうが住む世界である。子供達と唄を歌う。雪投げをする。かごめかごめをする。

そしてつうは、美しい布、「鶴の千羽織」を織り、自分（鶴）を助けてくれた大切な人、与ひょうへ贈る。布はつうが織ったもの、つまり先の用語で言うと「生産」されたものである。この生産物に込められた意味は上の「石炭」と比較した場合どうなるだろうか。「石炭」にこめられた社会的意味は、例えば「販売され得るものとして、誰かは分からないしかし確かに誰かに需要されることを目的として、かつ需要されるかされないかは未知の領域に属するもの」と表現しうる。つうにとって与ひょうが着てくれること、しかし、着てくれなくても与ひょうにあたえ、与ひょうが受けとったという事実だけですでにつうが布にかけた目的は満たされているのである。自らのためではなく他人のために織られ、生産されたものではあるが、そこは販売あるいは需要を思いめぐらす世界ではなかった。美しい千羽織は、ただつうと与ひょうの愛の共同体を確認し、象徴する意味を持てばそれで足りていた。しかし、2人が生きたのは、村のみの時代ではなくて「村と都」の時代であった。布を都に売りに行く人、惣どと運ずが、与ひょうに布は愛の象徴ではなく「商品」であり「貨幣」であることを教える。彼らは、すでに百両単位で買い取り、(与ひょうには内緒で)千両単位で販売する商人資本家であった。「これなんだわ。……みんなこれのためなんだわ。……おかね……おかね……あたしはただ美しい布をみてもらいたくて……それを見て喜んでくれるのが嬉しくて……ただそれだけのために身を細らせて織ってあげたのに、もういまは……」このつうの独白

には、失われつつあり、それを阻止する手だてはもはや見あたらない共同体（彼らの世界）とその破壊者としての「資本主義」の世界、炭坑労働者が住む世界がイメージされている。

この様に比較することにより、共同体における生産と消費の自然な関連、そして、資本主義におけるあり方との相違が見えてくるのである。絶対唯一の存在としてではなくて、他との比較において相対化され、流動化されその意味で一步科学的な把握が可能となった資本主義、そこにおける、産業循環と「生産＝消費」について検討することが本稿の課題である。『経済学批判要綱』『資本論』など経済学の古典が与えている諸命題の検出と検討を縦軸に、現代資本主義が、つまり現代の経済社会が感覚的レベルまで含めて与えている諸事象を想起することを横軸にし、その多分絶えず移動するであろう交錯点に焦点を合わせてテーマに接近してきたい。以下、第一章では、生産、消費、あるいは分配、交換などの相互関係に内在しているであろう具体的な諸契機の検出が試みられる。生産においては物がつくられ、消費ではそのものが摂取される。全体生産物の個人帰属が分配であり、交換は独立している両当事者の与え、受け取る関係である。この様な把握だけで対象は把握出来ているのか、この様な問題を念頭に置きつつ検討される。当然のことではあるが、そのような一見、一般的な領域を検討する際にも、資本主義の諸断片は念頭に置かれ折に触れて、取り上げられる。

資本主義は、商品・貨幣関係（市場経済）を一般的土台とし、その上で資本・土地所有・賃労働関係により、生産、流通、信用などが行われている、その点で他とは区別される一社会である。⁵⁾ 第二章では、資本主義の一般的土台である、商品・貨幣経済における「生産と消費」の諸々の態様が検出される。私的所有と社会的分業の経済社会において、孤立と連関、自律あるいは自立と相互依存、この様な一見対立する契機が併存している商品・貨幣関係を対象とする。ある不安定的なもの、離れているようでいて分離は出来ていず、連関しているようでいて互いに反発しているこの様

な姿、それは現在の市場経済の姿を垣間見ることともなる。第三章では、資本・土地所有・賃労働関係の運動を規定する諸法則が検出される。資本主義における産業循環、投機、恐慌、利潤率などが対象となる。それは同時に資本主義自体においてすでに潜在的、顕在的さまざまに内在している、したがって十分に実現可能なより高い経済社会として「ありうべき生産と消費、欲望水準の向上」などと言った領域をとりあげることの客観的妥当性を示している。

第一章 「生産＝消費」など

人間は、その「人類史」の端緒から、生存と生活のために「生産」を第一義的に位置づけてきた。1日、1年、そして一生の大部分の時間は生産のためにのみ費やされている。特に「食べる」対象を獲得すること、獲得できるかどうかは生存のための枢要の課題であったし、現在もそうである。人類史の圧倒的な年月の主要な生産部門は農業であったことがそれを示している。資本主義においては、農業は工業と並ぶ部門となり、社会的分業の一ブランチとなった。ところで、農業と工業を合わせたものとしての生産についてだけでも、さまざまな問題が内包されている。本題にはいる前に、その若干のものをとりあげてみよう。第一に、生産力と自由時間の関連の問題がある。歴史において、生産力は当該段階以前の社会が到達した水準を前提しその上でより以上の向上を実現してきた。戦争や、豊かであった自然環境の崩壊などによる後退はあったとしても、なお生産力は非可逆的な発展の過程であった。生産力の発展はそれを素直に捉えれば、同じ時間により多くの生産物を生み出すことを意味する。例えば、1時間に100個生産する段階から500個生産する段階としてイメージできる。それは他の新しい生産分野の開拓に必要な時間を与え、したがって生産物はより多くの種類となっていく。この様な過程を含みながら大局的には生産のための時間は節約できるはずである。しかし、実際の歴史におい

て、特に直接生産者の労働時間は短縮しているであろうか。同じ物1単位の生産に必要な時間が5分の1になれば、労働時間は10時間ではなくて2時間で足りる。ところが実際には短縮していないとすればそれは何故なのか。労働の時間と自由時間との和は一定、例えば16時間とすれば、労働時間が10時間であれば自由時間は6時間、労働時間は2時間であれば、自由時間は14時間となる。豊かな生産力はたっぷりとした自由時間に帰結せず、豊かな生産力と長い労働時間が両立している社会であることを確認する時、ある奇妙さを感じないだろうか。現代の資本主義においてはたっぷりとした自由時間を享受出来るのは「失業者」であったりするという事実、文明と科学と知性の最高の発展段階という自己認識をしている社会に相応しい姿であろうか。自由時間が豊かに実現していく展望が見える社会は、そこで芳醇な文化水準の享受、創作とより高い生産力水準の実現のための科学に費やされれば真に「豊かな社会」への接近を始めることが出来るのではないだろうか。これは消費の内容にも関わってくる。飢餓水準を突破しうるか否かという消費と、豊かな感覚を生み出し、享受しうる消費とは区別されるであろう。⁷⁾ 生産と消費をまた逆の角度から捉えてみよう。消費水準に飢餓的なものから豊かなものまでであるとすれば、そこには確かに生産と消費における逆の関連がある。生産力水準と生産物とその種類の多寡は消費の内容を決めていた。生産が独立変数であり、消費はその生産に服属する形で充足された。この同じ生産と消費には、しかし逆に消費水準が独立変数であり、消費水準に対応する形で生産が行われ、したがって生産が従属変数という関連がある。消費するのに適している場合のみ生産は意味を持つ。確かにそうであろう。しかしその場合には、消費しうる物以上の生産物が持ちうる意味についての検討が必要となってくる。しかし改めて、炭坑労働者の例をあげるまでもないが、資本主義の下で生産と消費はどのような関係に置かれているのであろうか。自らが生産の主体であり、したがって消費対象は確かにあるはずなのに、その生産者には消費対象は与えられていない。このような事実はいかなる社会経済的関連

のもとで成立しうるのであろうか。広い視野でさまざまな角度から把握することの必要性と可能性を教えている。

生産と消費について検討に入りたい。考察の素材は『要綱』の「序説」に求められる。「序説」においては今までに述べてきたような生産、消費のイメージに止まらず、生産という概念、消費という概念が分析されている。この検討の中で本稿のテーマにおいて、生産と消費を等号関係で結んだその意味も明らかとなるであろう。続いて、そこで示された諸契機との関連で、『資本論』が対象とされ、資本主義分析の脈絡において、どのように位置づけられているか、その跡が辿られる。ここで、対象とされているのは、生産、消費の一般的な分析である。マルクスは、特定の社会経済体制の分析との関連で、一般的なものにつき一面では緻密な分析を加えながら、他面では、一般的なものは「現実の歴史的な生産諸段階はどれも理解できない」とし否定的な判断をしている。しかし、実際に見ていけば分かるように、この「序説」の分析は、1つの歴史的な生産段階である資本主義を把握する不可欠の内容を構成しており、マルクス自身、「序説」の分析を一指針として資本主義分析を行っている。

一般性は特殊性を把握するには十分な条件とはなり得ないであろう。特殊性とは一般性からの乖離を意味するのである。しかし、一般性はまさに一般性であることにより特殊性に解消されることなく特殊性分析の脈絡の中に保存されているのである。マルクスの警告は、したがって特殊性分析を一般性分析によって代位し、それに解消することの欠陥にたいするものであろう。そのようなアプローチは、人類史はただ1つの不変の経済社会制度を知るのみであるとの理解に導く。過去の体制の生成、発展、消滅、異なった体制の転変は一つの歴史的事実である。それとは異なる理論は、したがって科学性からは遠いものになるからであろう。資本主義は過去の体制の否定と、その崩壊の上に誕生した事実は忘れ去ることは出来ないのである。1つの社会経済体制であることは、他の体制と一般性を共有することである。その上で、特定の社会経済体制における固有の諸法則を探り

出すことが客観性と科学性に近づく道であろう。

「序説」では、生産、分配、交換、消費について「生産では社会の成員が人間の欲望に自然生産物を同化させる。分配は、個々人がこれらの生産物の分け前にあずかる割合を規定する。交換は、個々人が分配によって彼に帰属した分け前ととりかえて手に入れようと望んでいる特殊な生産物を彼にもたらず。最後に、消費ではこれらの生産物が享楽の、個人的領有の対象となる。生産は、欲望に適応する対象をつくりだす。分配は、その対象を社会的諸法則に従って分配する。交換はすでに分配されたものを個々人の欲望に従ってふたたび分配する。最後に、消費では、生産物はこの社会的運動のそとにでて、それは直接に個々人の欲望の対象となり奉仕者となって、享楽でその欲望を満足させる。」としている。これは本稿でもすでに整理したように普通の把握のように見える。しかし、マルクスはそれを「皮相なわかりきった考え」とする。⁹⁾

序説では、「生産＝消費」は2つの主要な項目と、それぞれに服属した形で展開される5つの契機から構成されている。

ところで、「生産＝消費」を検討する際に確認されるべきこと、それは生産そのものである。以下検討する「序説」の分析からすれば、生産としての生産のみを語ることは確かに皮相なものかもしれない。しかし、単純なものは単純であるが故に、論理の大きな道筋を決める上で、対象を大きく把握する際に欠落させることはできないものである。欠落させると根本的なところで、進むべき道をそもそもの出発以前から誤らせることになるもの、それが「単純なもの」である。内容に入る。

人類史において、他の生命体と人類との分水嶺をなすものの第一のものが「生産」である。さきにも触れたように、生命体の課題はまず、食べることである。自らの種を存続させるためには、まず自らが生存する条件を整備することを第一義的課題とせざるをえない。食べることの前提をなす「生産」の意味につき、農業及び牧畜で例示する。いま、一方に採取経済をおき、他方に農業と牧畜をおいてみよう。採取経済は、人間の手が加え

られていない自然の中で、食物の対象を探し続けることである。その出会い、たとえ経験が、ある時期にはそこに木の実が実ることを教えていても、偶然性と不安定性、従って生存水準のレベルの下に沈んだり、かろうじてレベルに達したりといったものである。人間が、他の生命体と生きることの不安定性という意味でその生存条件に多くの共通性を持っていたのである。人間の自然への埋没、自然的条件によって翻弄される存在と言われる所以である。

確かに、現在においても、人間は自然の力に支配されるという命題はなお実感される。従って、人類の歴史は生産力と文明、環境のコントロールの手だての、後退ではなくて発展の過程であったとしても、現在にはなお、自然との関連において、そのあり方において、解決すべき課題が提起され、なお解決されるか否かはわからない、ある相対的な時代である。農業と牧畜、それ以前と以後などは、現在と全く無関係の段階とは言えない。

農業と牧畜は採取経済に比べて、段階的に飛躍した発展と言いうる。採取経済においては人間は自然にコントロールされていたのにたいして、農業と牧畜は、人間が人間以外の動物や植物の「繁殖」をコントロール出来るようになった。つまりその場その場の偶然的な食物の採取ではなくて、来年も、そしてその次の年も、自らの管理の下において、植物と動物を置くことが可能となり、あるレベルでの安定性と展望（生産と生活における計画性）が出てきたのである。そこには当然、手に入れた対象を、全て消費せず、繁殖、播種の対象として取っておいたこと、そこにおける禁欲、あるいは取っておいても餓死は免れうる生産力段階へ接近していたことを前提する。それ以前とは隔絶した生産力段階をすでに、一万年以前という単位ではかれる歴史時代において実現していたのである。このような単純な例示だけでも、人類の社会経済において、「生産」が第一義的な意味を持っていることは確認できるであろう。¹⁰⁾ 従って、「生産＝消費」における構成契機を検討する際の前提は、この様な意味での「生産」そしてその「消費」である。

本題に入ろう。「生産＝消費」における第1の項目は、生産は消費であり、消費は生産であるというそれぞれが意味内容を持つ2つのものが一対をなす命題から構成されている。生産は消費であるという言い方は、一見すれば、反対の意味を持つものを主語と述語におき、当惑と反発を誘いかねない文言である。検討に入ろう。まず、生産は消費であるという命題、それは次の2つの意味から成っている。第1、生産は、その人的要因及び物的要因その両者のある組み合わせによって可能となる。人的要因としては、生産者が生産により習熟しているかどうか、集団的レベルでは、生産の各セクションに適切に配置されているか、「人間は社会的動物である」と言われるが集団的生産力を発揮しうるか、将来への確かな予見を持ち、それに適合的な実践を組織出来るか、相互の連携とバランスが配慮されているか等の問題領域が現れてくる。これらは、結論的に言えば、いずれも生産においては、生産者、つまり人がその知的、精神的、肉体的エネルギーを「消費」していることを意味する。生産は従ってまず、生産の人的要因、労働力の「消費」である。ここで消費というと、なにか受動的な印象をあたえる。しかし、人はこの生産過程において消費されるところで、もしそうでなければ、その人に潜在的に、眠ったままになっていたさまざまな資質が、顕在化し、認識と遂行能力が現れてくる積極的な過程である。人間は、課題と目標を掲げた「実践過程」の中ではじめて、課題と目標を達成する手だて、最初に設定していた課題と目標の正否などを認識することが出来る。失敗は、次にその人に失敗しない手だてを教えてくれる。これは、学習であり、知識の獲得と継承と蓄積である。その意味で労働は、人間の発達と成長の場である。

知識の蓄積は情報と呼ばれ、コンピュータによって可能になったともいわれている。しかし、マルクスは、すでに19世紀中庸の時期において『資本論』労働過程論で、労働過程は「人間の欲望を満足させるための自然的なものの取得であり」、「人間生活の永久的な自然条件」であるが、その自然を人間の消費対象に加工する過程において、つまり自然を改造する

過程において、自らの「自然」「眠っている潜勢力」を発現させるとし、人間の内的世界における情報の蓄積について認識している。¹¹⁾ 生産は生産の人的対象の消費であり、その結果は、当初に課題とされていた改造そのもの、そして、生産過程で陶冶された人間である。これが「生産＝消費」における第1の契機である。

生産の要素には人的側面と物的側面があり、人的側面については今までに見てきたものとすれば、生産は消費であるというその第2の意味は、当然生産におけるその物的要因の消費、ということになる。これは、今まで人間の手が加えられていなかった自然、大気、空気、自然水、土地成分、太陽光、風、潮流等々の消費を含む。これらは、「環境問題」「有限な自然の問題」に関わり正面から対象とされるべきであろう。しかし、より狭く規定すれば、生産の物的要因は、人間が自然に働きかけ、改造する際にセットされる生産手段、及び加工される自然としての生産対象、原料である。生産手段は、経済社会の歴史を、より具体的に見る場合にその各段階をお互いに区別する指標となるものである。生産手段の1つである、機械体系においては、均質的、統一的動力源により、多数の道具、が、同じ道具であれば道具の協業として、異なる道具の組み合わせであれば道具の分業として与えられるのである。これらは、労働力における協業と分業とは類似のイメージで捉えられるが、明らかに生産の人的要因ではなくその物的要因である。

生産は消費である、その第2の意味は、生産においては、その物的要因、すなわち生産手段と生産対象が消費されるということである。

しかし、これらの物的要因の消費は単に消費に止まるものではない。いま、生産手段と生産対象が、人間労働の視野に収められ、稼働し、加工されている状態と、視野の外に忘れ去られて放置されている状態を比較してみよう。考察のきっかけとしては、例えば、家屋について、人が住んでいる家と空き家との比較があるだろう。人が住んでいる家、それは住むことにより、つまり使用し、手を加えられることによる少しづつ、傷んでい

く。つまり、消費されて、崩壊していく。しかし、人が住んでいない家は、それよりもはるかに早く崩壊していくという事実がある。生産手段、機械、生産対象、原料においても同じである。生産において、その物的要因は消費される。しかし、そのことによって、同時にある限界の中で、その価値は維持され、もし放置されていけばそうなったはずの崩壊と破壊から免れるのである。『要綱』ではこの点につき、「使用」されるか否かの違いとし「実際に使用されるのでなければ、使用価値としてはその価値を喪失し、……また実際に使用されれば、なおのこと消失する」とし、使用されないことが物にとって持つ意味を語っている。『資本論』では、端的に次のように言っている。「労働過程で役立つでない機械は無用である。そのうえに、それは自然的物質代謝の破壊力に侵される。鉄は錆び、木は腐る。織られも編まれもしない糸は、だめになった綿である。」資本家は繁栄の時にはこの「労働の無償の贈り物が目に見えない。……恐慌は、彼にこれを痛切に感じさせる」とし、産業循環の一局、すなわち恐慌時において、労働の手が加えられない機械の崩壊、資本にとっての価値の喪失に触れている。¹²⁾ 生産において人間の知的、精神的、肉体的エネルギーは消費されるが、その過程は同時に、発達した人間が生みだされてくる過程であるとした。それとは、やや異なるが、生産においては、物の消費はその価値を——方で確かに消費、消耗しながら——維持しているのである。

生産は消費である。その意味は生産の物的要因、生産手段と生産対象の消費である。これが「生産＝消費」における第2の契機である。

以上、2つの契機を含む生産は行われた。そして、生産は消費であるという、この一見奇妙な言い方の意味も明らかとなった。第1の契機と第2の契機あわせたものとして、生産的消費と言われたものである。すでに述べた、この生産は消費であるという規定の逆は、消費は生産であるという規定である。生産された物が消費される。ここで消費する主体は言うまでもなく、物ではなくて、人である。生命体は、自然の物を摂取し、老廃物を自然に回帰させ、そのような物質代謝によって生命体を維持している。

人間は、食事、衣類、住居、文化的諸対象を享受することにより、今日1日の生活と活動のエネルギーを蓄え、その意味において、労働の前提を準備している。消費は生産であるとしたその意味は、人は消費によって、生き、生活し、活動する諸前提を生産するということである。「消費と同一のこの生産は、第1の生産物の破壊から生じる第2の生産である。……この消費的生産……」。¹³⁾ 消費による人間活動の諸前提の準備、すなわち生産、これが「生産＝消費」における第3の契機である。そして、この時間が、人間が労働から解放され、疲れを癒し、明日の労働の準備ともなる時間である。

「生産＝消費」における第2の大きな項目に入る。その考察のきっかけはさしあたり次のように示しうる。生産が行われない場合、消費しようとしてもそもそもその対象を見出すことが出来るであろうか。生存と生活のために、消費は必要である。しかし、その人が直面している世界には消費対象は存在しない。その時、「消費」は観念の世界のみのこととなり、むなしく朽ち果てることが予想される。「生産がなければ消費はその対象を欠くことになる。」¹⁴⁾ 逆も同様である。生産はされたものとする。しかし、それがそのまま消費されずに放置された場合どうであろうか。これは、例えば次のようにイメージ出来る。夕食に準備されたものが、そのままいつまで経っても食べられず、放置された場合、特に、支度をした人の気持ちはどうであろうか。あるいは企業が精魂込めて生産した商品が、販売されずにそのまま店頭にいつまでも置かれている状態の場合、生産者あるいは販売担当者の気持ちはどうであろうか。生産された物は、いかに完成度が高く消え去ることが惜しまれるものであっても、消費され、従って消え去ることによって、生産者ははじめて満足を得ることが出来るのである。「生産がなければ消費もなく、消費がなければ生産はない」¹⁵⁾。

従って、まず消費については以下のようなになる。消費されることによって生産された物は、生産するにあたって事前に想定されていた目的を成就したことになる。生産された物が使われ、すり減らされ、食べられる等々

により、消え去ることによって自らの使命を果たすのである。そして、その意味は二重である。自らの生産物がつつがなく消費されると、生産者はその成果が認められたということであるから、彼はまた新たに生産活動への強い動機をもつこととなる。生産を最終的に終わらせるのは消費なのである。再生産の前提となる。これが1つ。その上で、もう一步、足を進めてみる。今までは、生産物がはたして消費されるか否かにのみ、焦点を合わせたものであった。しかし、現実はそのに止まらない。たとえ、消費はされたとしても、満足して消費したか、仕方なく消費したかには1つの大きな違いがある。消費者が満足している場合、生産者はその完成度の高さを誇り、その水準を維持できるかどうかに注意することで足りるかも知れない。しかし、そのようなならなかった場合はどうであろうか。もし、正常な生産者であれば、この様な消費過程に現れた乱れは、自らの生産過程を見直すきっかけとなるのではないか。消費過程は、ここで、より適切な消費の素材、加工の仕方等を生産過程に逆に指し示す場となる。消費において現れたさまざまな反応が、次の生産が単に可能かどうか、必要とされているかどうかを決めるだけでなく、生産の内容の改善、新しい質の生産物の創造への確かな手だてをも、もし生産者がそれに気づきうるならば、与えているのである。『要綱』では消費が「生産では目的を規定するものとして作用するような対象をも創造する」¹⁶⁾としている。生産を最終的に完成させ再生産に結びつくものとしての消費、新しい質の生産への指針を提供するものとしての消費、これが「生産＝消費」における第4の契機である。

続いて、生産については以下のようになる。繰り返すまでもなく、まず生産は消費に対して、その対象となり、素材となる。また、生産物の特定のあり方、対象の特定のあり方、つまり生産のあり方は、それに誘導され、それに従う形での消費のある特定のあり方を生み出す。箸もフォークも与えられていない場では手づかみでの食事となるであろうし、高級な塗り箸、そして香りがするおしぼりが供されている場合には、食事は、香り

を楽しみ、手を清潔にし、その上で箸を眺め、取りあげる、そのような場となるであろう。つまり、生産の特定の形は「消費の様式」¹⁷⁾を生産するのである。このことは、物としての生産物に止まらない。例えば、教育は、ある科学的真理、社会や自然の法則、技能等につき、それを提供する人と提供される人との関係として、能動的位置に立つ生産者と受動的位置に立つ消費者の関係とイメージした場合、教える側がいかなる内容の物を提供しうるかに対応して、受け手、消費者の側では、さまざまな人が「創造」されてくることとなる。より深い認識を持つ教育者の下では、より水準の高い結果を期待しうる。ここでは、受け手の側、消費者の側における生産物に対する的確な理解と評価、そのうえでの、教育者にたいする的確な是正への指摘、そして、教育者、生産者がその指摘の意味を理解でき、明日には是正、改善した教育内容を提供しうることを、それが「教育」という一つの、ある種の生産と消費の場で、解決可能でもあり、解決不可能でもある課題として組み込まれているのであろう。

これは、芸術作品などにおいても言いうる。古今の優れた芸術品は、それを見る人の感性と、知性そして情緒感覚を豊かにしていく。優れた音楽に触れた人は、それ以前に比べて心豊かになっている。そのような可能性を内包している。生産者がいかなる物を提供することが出来るかということ、消費者がどのようなものでも消費可能かということは問題としてある。そのような、反対要因を含んでいるが故に、以上の命題は深みを増すものとなっているのである。

消費に対象を提供し、特定の消費の様式を陶冶し、より高い生活、文化などの消費（享受）を創造するものとしての生産、これが「生産＝消費」における第5の契機である。

以上「生産＝消費」における、2つの大きな項目と5つの契機につき検討してきた。その跡をまとめれば以下ようになる。

項目Ⅰ 生産は消費であり、消費は生産である。この項目は次の3つの契機から構成されている。第1の契機—生産、すなわち労働力の消費、生

産の人的要因の消費。第2の契機—生産，すなわち，生産手段および生産対象の消費，生産の物的要因の消費。なおこの2つの契機は「生産的消費」と規定しうる。第3の契機—消費は，人の失われたエネルギーを新たに充足し，活動と，労働と，生活の前提を準備する。日々新しく，活力に満ちた「人」が現れる，その意味で人が「生産」される（「消費的生产」）。

項目Ⅱ 生産がなければ消費はなく，消費がなければ生産はない。この項目は2つの契機から構成されている。第4の契機—生産に最終的完成をし，新しい生産の動機を与え，新しい質の生産への回路をつくるものとしての消費。第5の契機—消費に対象を提供し，消費の特定のあり方をうみだし，例えばより水準の高い芸術品を鑑賞しうる人間を生み出すものとしての生産。

以上，「生産=消費」についての若干の分析はすでに終わった。ここでは，そのような分析の，一つの例証といった位置づけで，『資本論』における，上の諸契機の導入の跡を振り返っておきたい。『資本論』自体は言うまでもなく，資本制生産様式つまり，歴史上のある段階において，それ以前の社会経済システムの否定の上に生まれてきた特定の生産様式を対象としている。そして，以前に触れたように特定の社会経済システムを他のシステムとの共通性で把握することではなく，特殊性で把握するとしていた。しかし，これもすでに述べたように，事実としては『資本論』において，「生産」や「消費」という範疇，それらのここで述べたような構成契機はむしろ，資本制生産を把握する不可欠のものとして定置されているのである。断片的ではあるが整理しておきたい。

（『要綱』では，対象としての資本制生産様式を念頭に置きつつ，「社会」においては，生産者と生産物は，生産の後には引き離され，生産物は他の人との関係に入ること，直接の生産者がその生産物を消費するものではないことを指摘している。¹⁸⁾「生産」「消費」に続く「分配」「交換」の分析への導入部をつくったものであろう。そのうち取り上げる予定の「分配」，そこにおける2つの意味，また，直接に，資本主義の土台をなす商

品・貨幣経済に結びつく「交換」は「生産＝消費」の分析の脈絡の中で、簡単にでも検討が必要な対象である。）

注

- 1) 一般的には、この循環は期間の長短により次の3つに分類される。①キチンの波—在庫投資の流れが、生産者が意図したもの、意図しないものに区別されたいい3年の周期で循環する。②ジュグラ—の波—設備投資がだいたい8—10年の周期で行われ、景気もそのように循環する。③コンドラチェフの波—鉄道、工場建設など、一般的に技術革新がほぼ50年周期であるとした。なお、シュンペーターは、現実の変動はこれら3循環の統一的理解の中で把握しようとした。
- 2) 林直道『恐慌の基礎理論』（大月書店、1976年）によれば、このエピソードは、アメリカの炭坑労働者についてのパンフレットにあったものである。5頁参照。

なお、恐慌論、産業循環論は経済学において豊かな研究の歴史を持っている。ここでは若干の文献をあげておく。

①理論について・山田盛太郎『再生産過程表式分析序論』（改造社、1948年）—貨幣の流通手段機能、及び支払い手段機能に内在する恐慌の「可能性」、再生産表式における恐慌の「発展した可能性」、利潤率の傾向的低下法則および利子生み資本における恐慌の「現実性」、以降における「真の恐慌」という構成が示されている。特に、再生産表式と恐慌や産業循環という研究分野を早期に設定したものである。・高木幸二郎『恐慌論体系序説』（大月書店、1956年）—経済学批判体系と『資本論』との関係に関する先駆的な分析が含まれている。再生産表式における固定資本の更新に焦点を合わせ、恐慌の周期性が論じられている。なお同じく50年代に、遊部久蔵編著『『資本論』研究史』（ミネルヴァ書房、1958年。復刻版は1971年）で井村喜代子が、恐慌論の論争史を整理しており、また林直道『景気循環の研究』（三一書房、1959年）が出ている。・メンデリソン、飯田貫一他訳『恐慌の理論と歴史』（青木書店、第1分冊は1960年）—第1分冊は、恐慌と循環の緻密な分析があり、現在においてもその意義は失われていない。・吉村達次『恐慌論の研究』（三一書房、1961年）—利潤率の傾向的低下の法則と景気循環の研究および、ケインズをとり上げたところに特徴がある。・久留間敏造『恐慌論研究』（大月書店、1965年）—マルクスの原典からの抜粋と深い解

明が行われている。・井村喜代子『恐慌・産業循環の理論』（有斐閣，1973年）—「生産と消費の矛盾」を中心に再生産表式において、特に拡大再生産を分析している。

② 20世紀資本主義における恐慌と産業循環について・ヴァルガ，及川朝雄訳『現代資本主義と経済恐慌』（岩崎学術出版社，上一1968年，下一1969年）—第1次世界大戦直後の戦後恐慌，1929—33年恐慌が分析されている。・小椋広勝編『現代資本主義の循環と恐慌』（岩波書店，1969年）—戦後のアメリカにおける1948—49年，53—54年，57—58年，60—61年恐慌がとりあげられている。・山口茂『恐慌論概説』（清明会出版部，1970年）—20世紀に止まらず，17世紀以降の欧米の，明治維新以降1960年代までの日本の恐慌の歴史がコンパクトにまとめられている。・古川哲『危機における資本主義の構造と産業循環』（有斐閣，1970年）—20世紀資本主義における循環を，産業循環と「戦争循環」あるいは「体制解体＝危機循環」の統一として把握している。・トラハテンベルグ，及川朝雄訳『独占資本主義の貨幣恐慌』（岩崎放送出版社，1971年）—1900年，1907年，20年，29年，37年恐慌が統計資料に基づき分析されている。・長島誠一『独占資本主義の景気循環』（新評論，1974年）—ミッチェル，ヒルファディングによる景気循環の各段階の整理，過剰蓄積と操業度調整に注目している。なお，この時期に邦訳されたものとしては，両大戦間期アメリカの繁栄と恐慌を描いたフレデリック・アレン，藤久ミネ訳『オンリー・イエスタディ』（研究社，1975年）がある。・池上惇編著『現代世界恐慌と資本輸出』（青木書店，1973年）—国際通貨あるいは財政危機との関係で世界恐慌が分析されている。・高橋亀吉，森垣淑『昭和金融恐慌史』（講談社，1993年。初版は1968年）—日本の，1920年の反動恐慌，23年の震災恐慌との関連で27年金融恐慌が分析されている。銀行の倒産により預金が消えてしまった時代が語られている。・長幸男『昭和恐慌』（岩波文庫，1973年）—金解禁との関係で，1929年から30年代前半の恐慌期日本が対象とされ，農村恐慌と日本ファシズムとの相関にも触れている。

経済理論学会では，第23回大会（1975年）に「現代資本主義と恐慌」，第30回大会（1982年）に「世界長期不況と日本資本主義」，第42回大会に「90年代不況の性格」がテーマであった。

③ 90年代の作品について・ガルブレイス，鈴木哲太郎訳『バブルの物語』（ダイヤモンド社，1991年）—17世紀オランダのチューリップ球根の投機，18世紀イギリスのサウス・シー・バブル，1929年恐慌などが対比されてい

る。オランダではチューリップの球根の暴騰と暴落の後「長期にわたる不況が続いた」。この様な歴史の上でオランダはチューリップで有名となった。それと、「先物」との関係については湯浅赴男『文明の「血液」—貨幣から見た世界史』（新評論、1988年）がある。・宮崎義一『複合不況』（中公新書、1992年）—1980年代のアメリカ、そして80年代から90年代の日本における不況が金融と資産価値の変動との関係で分析されている。同じ著者によるものとして『ポスト複合不況』（岩波ブックレット、1997年）、『国民経済の黄昏「複合不況」その後』（朝日新聞社、1995年）がある。また、1970年代の物価騰貴を「企業投機家時代」としたものに『日本経済の構造と行動下』（筑摩書房、1985年）がある。・佐美光彦『世界大恐慌』（お茶の水書房、1994年）—世界恐慌についての膨大な理論的実証的分析がある。

- 3) K. マルクス『資本論 第3巻』（『マルクス・エンゲルス全集』第25巻—a, 大月書店, 322頁。以下、『全集』と略記し、この全集の巻数、頁数で示す。なお、失業者に対して、「失業保険」「生活保護」等が支給されるなら、この一家は石炭購入が可能であろう。しかし、失業保険などは、国家の領域に属することである。本稿では、「国家」範疇は捨象されている。

ただ、現代資本主義において、たとえそのような制度がある下でも、生活を維持する手だてを無くし、かつそのような事実が「他人事」として、放置され忘れ去られている事実は無いだろうか。そして、もし困窮者がそのような状態にあるとすればその原因はどこにあるのだろうか。本稿で解明を試みた、しかし解明にいたらなかった課題である。

この炭坑労働者一家のエピソードは、固有に例えば、1929—32年世界恐慌の下においてのみ生じた、過去の出来事ではない。現代の日本においてもこのエピソードが示す世界から無縁ではありえない。その意味で、現代にまで連続している事象である。なお、1997年、時の総理大臣、橋本龍太郎の「日本は世界恐慌の引き金を引かない」という発言を記録しておくことは無駄ではない。「恐慌」は、すでに現代資本主義では起こり得ない過去の事実と言われてきた。しかしそうではなかった。われわれは、軽々しく、その限定された一時代の現象にのみ根拠を置き、あるいは利害関係が要求するところにより、経済学が解明してきた法則的諸事実を否定し、捨て去ることは慎重さが必要であろうし、科学の前では目先の利益のみへの忠実さからの解放と、真理への若干の謙虚さが必要であろう。

- 4) 木下順二『夕鶴・彦一ばなし』（新潮文庫）。『夕鶴』は、戯曲の世界であるが、経済学の対象としてもとりあげられている。平田清明『市民社会と社会

主義』(岩波書店, 1969年)の「序にかえて」は、「夕鶴」とマルクスと題されている。平田は、「夕鶴」の公演を見、その中で自ら感得したことを次のように書き記している。一市民社会、商品経済と貨幣経済において、生産は当然のことながら「人間的営為」として行われている。しかし、その生産物は、商品であり貨幣である。その一線で市民社会は「人間が自然的な人間から市民的人間に転化」する過程であり、「人間による自然喪失」である。これは「マルクスの価値＝貨幣論の人間学的意味」に通底するものである、と。

なお「夕鶴」の公演は、1949年の初演以来、1997年8月で1037回となる。つう役は山本安恵から坂東玉三郎となっている。

ここで触れた、資本主義と共同体の比較というテーマはより真剣に、より広く深い検討が期待される分野である。このテーマ設定の意味は二重である。第1、資本主義は共同体の破壊の上に成立したものである。したがって、両者は、共同体から資本主義へと言う序列で時系列的に継起する2つの体制として把握しうる。ここでは、共同体は、すでに崩壊した、過去の遺制と理解され、すでに失われてしまった、しかしなお忘れ去ることが出来ない郷愁の対象となる。第2、資本主義の下においてなお共同体的なものは保存されている。私的所有、自立と自律、そして孤立の中にありつつ、むしろそれが故に共同体的なものはそのなかに組み込まれている。この様な把握はさらに細かく2つの流れに繋がっていく。1つは、資本主義自体が共同体そのものであるという理解である。企業、国家、家族、さらには例えばアジアという地域これらが共同体としてイメージされそのようなイデオロギーでコントロールされる。他の1つは、資本主義は共同体的な物を分解しつくそうとするがなお、消滅することなく自らを主張し、将来の体制ともなりうる。人間は、基本的に社会的な存在である。資本主義は、一方で私的所有により互いに他人であるという関係を定着させつつ他方で、世界的な広がりや深みにおいて、互いのさまざまなレベルにおける交流を可能とさせる。共同体的なものは、そのなかで自らの立脚点を作る。確かに、共同体は一度は消滅した過去の体制である。しかし、もし過去の共同体が随伴していた、身分による、性による、年齢による等々の差別、抑圧、飢え、戦争などを払拭しうるなら、そして資本主義の歴史的な諸成果を継承し得るなら、資本主義に継起して展望しうる将来の体制として定置しうる。

同じテーマは、より抽象的には、資本主義における社会的生産と私的生産、社会的労働と私的労働との相互関係、形式的に見れば相対立し、否定し

あう両者が共に姿を現す所から生じる諸法則の検討という課題に結びつく。

- 5) 資本主義経済は、ここでは商品・貨幣そして資本・土地所有・賃労働とした。より詳しい構成把握の枠組みは、以下のような、マルクスの「経済学批判体系プラン」として残されている。

I 資本 ①資本一般②資本蓄積③信用資本④株式会社⑤金融市場⑥富の源泉としての資本 II 土地所有 III 賃労働 IV 国家—租税と国債 V 外に向かっの国家—植民地, 外国貿易, 為替相場 IV 世界市場そして恐慌 (高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店, 第2分冊, 185頁) なお, 同『要綱』の他の箇所では, この世界市場と恐慌につき次のように位置づけている。「生産は総体性として措定され……全ての矛盾が過程に登場する。……恐慌は……新しい歴史的形態の受容への促迫である。」(第1分冊, 146頁)
- 6) 『全集』第4巻, 96頁。なお『要綱』には, 固定資本は生産の連続性を可能としかつ必要とし, このことが「消費の連続性と不断の増大」を要請した, との分析がある。第3分冊, 670頁を参照されたい。『資本論』では「資本主義的生産様式は生産の大規模を前提するので, また必然的に販売の大規模をも前提する」としている。(『全集』第24巻, 136頁)
- 7) 消費と文化の関係については池上惇によって展開されている。以下の文献を参照されたい。『文化経済学のすすめ』(丸善, 1991年) 『生活の芸術化』(丸善, 1993年) 『情報社会の文化経済学』(丸善, 1996年)
- 8) 『要綱』第1分冊, 10頁。
- 9) 同上, 10頁。
- 10) 同上, 第3分冊では, この点「素材的側面からみれば, 生産過程ではじめて生産物が創造される。これが第1のそして本質的な素材的变化である」(617頁)と, 生産の本質性を述べている。
- 11) 『資本論』第23巻—a, 234, 241頁を参照されたい。なお, 人間を「自然」と規定することについては, 例えば『要綱』第3分冊では「主体的自然」(423頁)としている。この規定は, 環境経済学, 教育の経済学あるいは貧困化論とかかわる, 新しく開拓が要請されている研究分野である。梅垣邦胤『資本主義と人間自然・土地自然』(勁草書房, 1991年, 第1刷, 98年, 第2刷)を参照されたい。
- 12) 『要綱』第2分冊, 193頁, 『資本論』は第23巻—aの240, 270頁。なお, 『資本論』では次の記述もある。「機械の物質的な磨滅は二重である。一方は, ……機械の使用から生じ, 他方は, 使われない剣が鞘のなかで錆びるように, その非使用から生じる。」(527頁)

なお、ここでは物のみを、かつそれが放置される場合のみを取り上げたが、人が放置、無視あるいは反対に酷使される場合といった問題は、重要な研究テーマである。人間がその環境から、無視される場合、放置される場合また逆に酷使される場合、虐待される場合、どちらも人にとっては「崩壊」の条件となる。子供や老人だけではない。職場においても、家庭においても、地域においてもそして、年齢や性をこえて、直面しうることである。ここでは、人間と自然にたいする「適度な」対応ということの意味だけを指摘しておきたい。

- 13) 『要綱』第1分冊, 12-13頁。なお、生産は消費であり、消費は生産である、という判断に関してはヘーゲルの文言が参考になる。「有限なものは、常に外部から制限されているのではなく、自分自身の本性によって自己を揚棄し、自分自身によって反対のものに移っていくのである。」(松村一人訳『小論理学』岩波文庫, 246頁)「純粹の光と純粹の闇とは2つの空虚であって、両者は同じものである。曇らされた光と照らされた闇になってはじめて、それ自身の中に区別をもつことになる。」(武市健人訳『大論理学 上—1』岩波書店, 94頁)
- 14) 『要綱』第1分冊, 13頁。
- 15) 同上, 13頁。
- 16) 同上, 13頁。この点、現代資本主義の下における「販売」「マーケティング」に関わる。高圧的マーケティング、あるいは川上(生産者)からでなく川下(消費者)からなどの視点がすでに出ていることは、記憶されるべきであろう。
- 17) 同上, 14頁。
- 18) 同上, 16頁。